

「おさしづ」第4巻における本部事情と「道」

『おさしづ改修版』第4巻(明治29～32年)の本部事情に関する「おさしづ」における「道」の用例を整理する。第4巻には本部事情の「おさしづ」が91件ある。そのうち、「道」が用いられるのは43件、3回以上「道」が繰り返し用いられるのは23件である。第4巻の本部事情の「おさしづ」のうち、4割近くを本部の土地、建物に関する伺いや願いが占めている。たとえば、明治29年5月31日「城作治郎屋敷地所買入れの願」といったものである。こうした願いに対しては、基本的に「道」という言葉は用いられず、「委せ置こう」などと具体的に指示がある。この巻で「道」という言葉が多く用いられるのは、おもに、内務省訓令を受けて、婦人会結成に向けて、一派独立に向けて、という三つの事柄に関連した「おさしづ」においてである。以下、その三つに分けて用例を確認する。

内務省訓令を受けて

明治29年4月6日、内務省訓令第12号が発令され、当局からの取り締まりが厳しくなった。それに対する心構えについて次のように論されている。

反対する者も可愛我が子、念ずる者は尚の事。なれど、念ずる者でも、用いねば反対同様のもの。……世界の反対は言うまでやない。道の中の反対、道の中の反対は、肥えをする処を流してうようなもの。(き29・4・21 内務省訓令発布相成りしに付、心得まで伺)

「反対する者も可愛我が子」として、当局や世間からの反対には寛容な態度を示される一方、教内にあっても教えどおりに通らないのであれば「道の中の反対」になると言われ、どんななかも、「はい」と答えてひたむきに歩みを進めるよう励まされている。

その際、教内の人々が心をつなぎ合うことを強調される。

さあ〜万事皆方法の変わった事で、当惑して居るやろ。暗い道になりたと思う。……並んで居る顔、実々兄弟治めるなら、明るい道は今にある程に〜。(き29・5・20 五月十八日会議案の点に付願/第四、天理王命の御名、天理大神と称する事願)

このように、教えに付きしたがう者同士が真に兄弟としての心を治めるなら、すぐに「明るい道」になると説かれる。

婦人会の創立に向けて

天理教婦人会の創立は明治43年であるが、それに先立って明治31年3月に婦人会を始めかけるようにとの「おさしづ」があった。その一連の「おさしづ」では「この道、男だけで、女は世界へ出さんのか。」(き31・3・30 前日おさしづの婦人会内の事情に付一同話しの上願)など、男と女に隔てはないと繰り返し説かれる。

これから話、男女の隔て無い。よう始めた道聞き分け。この道始めたは男か女か。これから悟ればどんな事も分かる。(き31・3・26 前日増野いとのおさしづより、婦人会の事に付おさしづありしにより、以後の筋道心得事情申し立て願)

男と女の隔てはないということは、「この道」が教祖から始まったことを考えれば分かったと論される。さらに婦人会として始めかけるといことについても、この道の始まりとの関連で説かれる。

この道掛かり、よう思うてみよ。一日二日、又三日という。一度で出けたものであるまい。年限で出けたもの、これか

ら一つ組んだら一つあたゑ、二つ組んだら二つあたゑ、この理聞き分け。(き31・3・28 前日おさしづにより教長へ伺伺い申し上げ、その趣きは婦人会の処何か区域を立て、何とか名前付けますものやという願)

このように、「この道」が一時になったのではなく、年限かけて神が連れて通ってきたことを説かれ、人間心で一時にどうしようというのではなく、長い目で見て、親神にもたれて一つ二つと始めるように促されている。このように、ここでは、新たに婦人会を始めるに当たり、「この道」のはじまりに照らして思案するように論されている。

一派独立に向けて

明治32年には、一派独立に向けた請願運動が本格的に始まる。それについての心構えについて次のように説かれている。

綺麗な道は急いてはいかん。急いては綺麗とは言えん。成って来るが綺麗なもの。この順序聞き分けてくれ。(き31・8・3 天理教別派独立運び方の願)

人間の心これだけこうしたならと取り運ぶ理じゃない。頼んでする道じゃない。何処へどうするのやない。皆一つの理余儀無く道を通してあるのや〜。先一本立ち、真の心が一本立ち、皆々一つ心を持ってくれにやならん。(き32・6・25 清水与之助本局へ交渉の結果一先清水帰本の上、本局へ掛け合い事情の願)

このように運び方について、「綺麗な道は急いてはいかん」「頼んでする道じゃない」と言われる。そうした人間思案の運動によるのではなく、「一本立ち」(一派独立)するには、皆の心が一本になることが重要なのだと論される。そして、この問題の脈絡では次のように「この道」の始まり、成り立ちということが何度も説かれている。

元という初まりというは印も無く、あれは何じゃ気の間違いかいなあ、と、いうような中から成り立った道。/元々西も東も北南も、何にも分からん中から出けた、なか〜の道やで。(き32・6・6 独立願に付教長御心得のため御願なされし処、……本部員教会長一同打ち揃い出席の上御願/一の手を打ちし後へ続いて)

この道という、元々難しいて〜ならん道から成り立ったのや。その中を道に一つの心を寄せて、順序運び来た。(き32・6・14 天理教独立の件に付、……上京御許し願/東京にて家屋一箇所借り入れの願)

この道古き者は聞いて居るやろ。願うてどうするのやない。なれど、年限から天然の道の理によりて成り立った道と論してある。(き32・7・23 天理教独立願書に添付する教会起源及び沿革、教祖履歴、教義の大要に付御願)

こうして、独立の運動はそれほど簡単にはいかないことを見越して、「この道」が難しいなか成り立ってきたことを思つて事に当たるように論されている。

このように第4巻の本部事情では、「この道」のはじまり、成り立ちが繰り返し説かれている。それによって、「この道」がこれまで続いてきた元を心に治め、皆が心をつなぎ合つて、新たな歩みを進めるように論されている。